

## 労働に対する尊敬

オットー・サロモン 著  
横山悦生 訳

教育的スロイドの目的の一つは、肉体労働に対する尊敬の念を若者に育てることである。以下では、この目的がどのように正当なものに見なされるか、合理的に組織されたスロイド教育がどの程度その達成に貢献できるかを簡潔に確認したい。

多くの例の中で、以下に示すような一つの例がある。理性の才能に恵まれたであっても、人間はしばしば理性が示すことにまっすぐに反対するように思考し行動をすることがある。とりわけ歴然としているのは、労働に対する軽蔑、一部の人間が労働に対してとともに労働に従事する人に対して抱きうると考えられる軽蔑である。多くない概念の混乱がここに見取れるだろう。というのは少し考えてみれば、人間の労働は人類にとっても個々の人間にとってもその存在と存続にとっての基礎的な条件であることは明らかである。自然は物質的な生活を可能にするために人間が必要としている多くの有用なものを作り出すことは確かに事実である。人間が労働によってのみ自然が人間に提供するものの中から有用なものを引き出すことができることもまた同様に確かなことである。もし呼吸するための空気やわれわれが導かれる太陽の光を奪うならば、自分自身のまたは他の人の意識的な努力しか自然はわれわれに与えていない。最も原始的な食料であり、空腹を満たす木の実や、喉の渇きを潤す井戸からの水は努力によってのみ利用することができる。同様に、最も簡単な布の服や最も簡単な住居もそうである。自然は材料を与える、しかし神が直接的あるいは間接的に提供するものをわれわれが享受するのは労働の遂行によってのみである。楽園から締め出された人間への神のメッセージ「おまえたちは顔に汗水垂らすことによってパンを食べなくてはならぬ」は文字通りの意味で受け取られなくてはならない。なぜならば、現在の社会情勢のもとでは、個々の人間は自分自身で労働することなしにパンや他の糧を得ることはできるとしても、しかし必要な労働を他の人にさせなくてはならないからである。その際誰が働くのかは全く意味がない。なぜなら、ここでの神の言葉は個人ではなく人類に課されており、労働は必要不可欠なものであり、そこから逃れることは不可能である。

もしこの考え方にわれわれが従うならば、それはわれわれを以下のような理解に導く。人がそこから有用なものを引き出す限り、ほとんどすべてのこの世の良いものは努力を前提とする。

確かに人間は物質やそこに作用する力を生み出すこともなくすることもできない。しかし人間は創造されたものを自分の物にし、変えることができる。また人間にとって有害なものを取り除き、あるいはそれを人間に有用なものに変えることができる。人間が次第に地球上で覇権を取り、強化するのは、労働によってである。したがって、ある意味では人間自身が有用なものを作り、労働はこのことが起こす梃子であると言える。

よく知られたフランスの作家が述べたように「われわれにいろいろな利益を提供する、つまり羊毛や卵や労働や肉を提供するすべての家畜は、最初は野生であり、人間にとって役に立たなかった。われわれの意志にしたがって、動物を人に慣らし、外見を変え、改造したのは労働であった」。

「人間は、好みに応じて労働馬や競走馬、車をひくための牛、肉牛、羊毛用の羊、肉羊、卵を産む鶏、食用の鶏、鳥をとるための猟犬、ブルドッグを作り上げた。確かに家畜の展覧会や絵画の展覧会を両方とも訪問すれば、技術が自然と同様にそこに出されたものに貢献したことがわかるだろう。農産物や庭で作り出したものも同じような事情である。すなわちわれわれの庭や牧草地は、詩人が主張するように、馬鹿げた人が真似していうように、自然の作品ではない。そうではなくて、単に人間の労働の産物である。」

「あらゆる二重咲きの花は栽培によって作り出される。道端に育つ野生のばらと園芸で育つばらと比較すれば、われわれはすぐに何が自然の賜物であるか、このバラが人間の労働のおかげでその後どのように変化し、改良されたかがわかる。」

「同じようにわれわれが食べる、果肉の豊かで水分が多いあらゆる果実は、数百年も続けられた合目的な労働によって現在あるものになってきた。人間はアジアで小さな野生の植物を探し求めてきた。それらの果実はそこに由来している。それは現在のリングゴヤナシや桜の実に似ている。そのことは野生のばらが葉の数の多い

よく香るばらとよく似ていることとおおよそ同じである。」

「われわれが栽培している鞘のある果実は、長い道のりともっとも忍耐を要する労働によって一つの生産物になった。われわれがジャガイモと呼んでいる大地の果実も自然がわれわれに与えたものではない。人間は最初アメリカ大陸からそれを持ち出さねばならなかった。その後現在あるようなものになるまでに手を加え、形を変え、改良した。このことすべては比較的短い時間で起こったが、アメリカ大陸の原住民のこの大地の果実を栽培することに尽力した時間についてわれわれは計算に入れていない。われわれはどんなに離れた国においてもなんらかの種類のジャガイモを見るので、われわれはすぐにそれはまったく自然のおかげだと考える傾向がある。しかし、それは最初のスペイン人が上陸するずっと以前にアメリカ大陸の一部ですでに作られていた。人類はその場所でヨーロッパや他の地域の至るところと同様に自然を有用なものに作りかえてきた。」

「われわれの利用している麦もそれはまったく自然の贈り物ではない。それはエジプトの北部に野生の状態で生えていた。しかしその種は小さく貧弱で、ごく少ない食物を生み出す。われわれのためにこの小さな麦の種を現在の主要な栄養源となっている小麦粉で満たすためには何百年もかかり、膨大な量の人間の労働が投入されねばならなかった。麦の種が他の植物と異なるのは、ある量のタンパク質を含んだ原料、それはしばしば4分の1のタンパク質を含む原料であるグルテンを含むことである。われわれがこの貴重な原料で思い浮かべるのは、このいろいろな種類の穀物の栽培に命を費やしてきた祖先の血と肉である。」

労働が人間の存続や平安のための絶対的な条件であることを疑う余地がないならば、どんな労働であれ、藁を共通の乾草の山へ積み上げない人は神によって課されたところの自分自身に対する義務や同胞に対する義務を果たしたとみなすことができない。ルソーによれば、このような労働をしない人、つまり自分の労働を代替として交換せずに食べようとする人は泥棒にほかならならない。また社会の財産を盗んでいる。このことは当然彼が実際に労働できることを前提としている。すなわち若くて健康な者が社会に対して一定の義務を持っているならば、他方で社会は老人や病人に対して一定の義務がある。このようなことに目を向けると、少し考え方を整理すれば、一人の人間が他の人間に対して軽蔑する必要があるならば、働けても義務を忘れて働かない人に向けられるべきである。義務感から仕事をしているか、または働くことを強制されているか、またはその両方によって労働の命令に従っている人には向けられるべきでないことは誰でも理解できる。今でも普通の場合状況は反対であり「何もしない人間には何かをする人間を軽蔑することが適切であるとみなす習慣があり続けた」と、ドイツの作家ポール・ハイセが言うのはある程度正しい。多くの怠け者や自分で生計を稼がないで、お金を浪費する男性は、自分の生活の糧を稼ぐために正直に働いている人よりも同じ名誉だけでなく、より大きな名誉をもつ権利があると考えている。ダンスパーティや海水浴のことしか考えない多くの若い女性は、彼女の姉妹を教えている女性教師や社交生活の義務を果たすために必要な服を器用な手で縫う裁縫師の女性を傲慢な表情で見下している。

しかし、時代の特徴を理解しようとする人にとっては最近の数十年間に労働と労働者に対する尊敬が上昇してきたように見えるはずである。自分の父親や兄弟やおそらく母親でさえも若い女性たちのために食物や服だけでなく、さらに若者にとって魅力的な娯楽を楽しむ機会を与えるために働くならば以前はおそらくそれで十分であった。しかし現在では若者たちは、ためになる仕事、彼らがしたいことを探し始めた。ハイセが語るような蔑視はいまだに残っている。しかしこのような蔑視は以前にあったようには明瞭ではない。世の中が注目するほどにはそれは重要なことではない。この弱点があからさまになることで恥をかいているようである。労働に対する蔑視はアルコール中毒と同じように恥ずかしいことである。この二つのことは少なくとも以下に述べる点で減少している。現在の方がかつての場合よりもより恥ずかしいことになっている。アルコールによって墮落することや、その分野で自分のやったことについて大声で自慢することはあまり適切ではないと少なくとも見られている。恐らくアルコール中毒やその兆候に対する厳しい見方は労働への蔑視の点においても現在我々が変動期にいることを示している。また、出自や名前によって人を評価することよりもその人がなした労働の量によって評価するような時代になってきたことによって、時代の夜明けが見られることを示している。

われわれの時代は恐らく転換期であり、他のあらゆる転換期と同様に新しいアイデアあるいは新しい考え方が浸透する時代であるので、その実現において特殊な実践的な困難に直面している。労働への尊敬の点でもそうである。労働への尊敬がますます大きくなり、無為に対する反感がますます強くなるにもなって、働く義務、有用なことをする義務が次第に重要視される。しかし労働の義務、より正しく表現すれば、この義務の感覚は他の感覚すなわち「労働への権利」の感覚をも生み出してくるに違いない。労働することがすべての働くことのできる人間の絶対的な義務であるならば、自分の労働力を使うという一つの権利も持っているに違いな

い。自分の義務を果たした満足を感じることは慣例的な束縛によって妨げられない。しかし労働の権利はある留保がある。二人の人間がいて同じ職に応募する場合、一人が経済的に裕福な状態にあり、もう一人が労働によってしか生活できない状態にある場合、もし裕福な人が自らの給料を低くすることによる有利な競争条件を利用することによって、労働力が唯一の資本であるという人と競争するならばそれは公正であるかどうかは疑問でさえありうる。しかしこの理解によれば、市場が事実上常に求職者で溢れているとき、よりよい収入を必要としている人間の収入をうばうべきでないという理由で、経済的に独立した人間の働く権利が否定されることに対して異議を唱えることができる。報酬のない労働が与えられないならばおそらく働く権利を奪うことになるだろう。しかし、そうではない。ここ地上には多くの病気や貧困や無知がある限り、仕事が不足したとしても何人にも何かすることがある。そこには善意さえあれば未開の土地だけではなく、雑草に覆われている場所もたくさんある。生計上の心配によって邪魔されない生活を送り、私たちが生きている世界の善意を十分に得ている人は、苦勞している隣人のために自分の労働力を役立てる。特にイギリスでは若い男性や女性が不幸な人々や無知な人々を支え援助するためにそれらの人たちの中に入っていくという例に学びたい。おそらく給料はないが、それゆえ小さくないあるいは確かな報いがある。

\* \* \*

労働への尊敬は、その人自身が自分の生活の糧を稼ぐということではなくても、何かの種類のある活動を通して生活の糧を稼ぐことに値することを行うことを各人が理解しなければならないことを含んでいる。すなわち多くの人は労働への尊敬の念を抱くが、それは彼ら自身が従事している労働あるいは彼らの社会階級に属する人々が従事する種類の労働への尊敬のみである場合が多い。したがって、いわゆる理論的あるいは知的な性質をもった活動をする人々がその労働を肉体的な労働と呼ばれるようになったものよりも高度なものとなす。他方、多くの場合肉体労働者は理論的な活動の重要性や意義を過小評価している。「彼はただの大工だ」、「彼は働いていない。本の上に鼻をぶらさげているだけで、事務所に座って書いているだけだ」というような表現は、他の人間の活動に対する軽蔑の現れである。つまり、人間が社会において互いに無条件に支え合っているという相互依存性を理解するための教育も能力も欠いていることを示している。社会は厳密に言えば、どの個人も自分の任務をもつ有機体である。一人一人の人間においては、例えば脳が活動するためには肺や心臓のような他の器官もその機能を遂行しなければ脳はほとんど機能しない。それと同じように、その職業が理論的なものである人は他の人間が自らの労働によって物質的な必要を満たさない限りその理論的な活動はできない。他の人の労働はある程度その人の活動の前提であり、それゆえその人の遂行する活動と同じ必要性があり、同じ尊敬と配慮に値する。教師であること、裁判官であること、商人であること、これらの活動分野と関連した任務を良い、信頼できる方法で遂行することは確かに社会のためになることであり、それによって社会の尊敬を得るに値することである。しかし、すべての人間的な活動の特徴づける拡大した分業のもとでは、当該の教師や裁判官や商人には見知らぬ人によって遂行されていることの中に肉体的な労働が彼らの活動に不可欠な構成部分として含まれていることを忘れてはならない。精神的労働と肉体的労働の伝統的な区分はもちろん十分に根拠があるものではない。なぜならある労働がどれだけ強い筋力を要求するとしても、その遂行において常に精神的な要素—理解力や判断力や記憶力等々—を常に含むものであり、ある種の肉体労働においては疑いもなくこの精神的な要素が多く精神労働に要求されることと同じ程度に含まれる。

意見が分かれることはほとんど無いであろうが、個人にとってだけでなく全体としての社会にとっても、肉体労働者という意味においてのみ「労働者」の名称を独占することができる人々も、その職業がもたらばまたはほとんど精神力を要求する人々も、双方の労働者が異なる種類の労働の性質について相互に正しい理解に到達することが非常に重要であり、ここに教育問題が存在することは明らかである。重要であることは、肉体労働者がより精神力を要求する労働を評価することを学ぶだけではなく、肉体労働者ではない人々により物質的な性質の労働がいかにもその理解と遂行において容易ではないことを認識させることも重要である。これらの両方の点において、実際に自らの経験に基づいてこそ永続的な何かが生み出される。肉体労働者が理論的な作業の練習によってそうした作業と結びついている困難性を理解する一方、実際の肉体労働を体験することこそが、それがもつ状況を知らない人々に容易に定着する偏見、知識または思考や配慮と結びついた技能をその遂行者に要求しないとする偏見、これらの偏見を絶滅できる唯一の手段である。若い女性の主な仕事は美を勉強することにあると一般に言われているが、その意味は熱心に小説を読み、絹糸と金糸を交互に縫うという意味に解釈される。その女性は一般的には、例えば大工の仕事をしたことではないと見ている。しかし彼女自身が鉋と鋸で仕事をする機会を得るならば、比較的にきちんとしたまな板や十分に質のよい台を作るよう

な機会を彼女自身が自分で試すならば、職人の労働とその仕事の難しさについての彼女の評価は、その仕事の難しさとその労働とが結びついていることでまったく違ったものになる。その後、彼女はその作品の値段を値切るまえに一度以上は自分の経験によって知った、その製作の難しさを考えるであろう。仕事の評価に続いて労働者に対する評価もある程度高くなるであろう。ここでは彼らがどんな仕事をしたのかによってではなく、どのように仕事をしたのかによって人間を互いに評価することを徐々に学ぶことが重要である。つまり一人一人がレングレン夫人の「少年たち」と共に一番遠くまでボールを投げた人が一番優れた人であるという理解に至ることが重要である（注1）。

教育（*uppföstran*）という目的で設定されたスロイド、つまり実際の肉体労働はこの点で想定以上の役割を果たすであろう。私が想定以上であるというのは、学校へのスロイド教育の導入の一定の作用が既に示されているからである。確かにわれわれの教育施設—レベルが低いものも高いものも—この点で罪を償うことがたくさんある。理論的な知識をもつばら教えることを狙うことによって、あらゆる肉体労働との関係から距離をおくことによって、彼らは自分の生徒に世代から世代へと間接的な方法でそのような労働それ自体には価値がないという確信を根付かせてきた。その後これらの生徒がすべての肉体労働からの解放と関係しているという観念を抱いて人生をスタートさせるとしてもそれは不思議なことではない。優秀な農民や手工業者になれるかもしれない多くの若者が学校を通して彼らにあまり適していない進路へと誘導されてきた。社会問題が注目され、一つの階級が他の階級に対して扇動（労働運動、階級闘争など）を起こすようになってきた現代において、もし将来の世論が準備される場である学校が言葉においてだけでなく行動において、すべての尊敬すべき労働が形成する価値を教えることを試みるならば、そのことには非常に重要な意義がある。ルソーが述べるように「人はできるだけ行動によって語らねばならず、不可能なことだけを言うべきである」。

（注1）Anna Maria Lenngren(1754-1817)はスウェーデンの有名な詩人で、彼女の詩(“*Pojkarne*”)の一節から採用した表現である（訳者注）。